

大阪大谷大学

平成二十九年 度 入学試験問題（一般入試 後期）

国 語

注意事項

- 一 設問は三題あります。そのうちの二題を選んで解答してください。
- 二 問題用紙は全部で十六ページです。解答用紙は一枚です。
- 三 解答用紙の所定欄に受験番号と氏名を記入してください。
- 四 解答はすべて解答用紙の所定欄に記入してください。
- 五 問題用紙は持ち帰ってください。

□ 次の文章を読んで、後の間に答えよ（字数制限のあるものは、すべて句読点等を含む。設問の都合上、原文の一部を改変している）。

その子供には、実際、食事が苦痛だった。体内へ、色、香、味のある塊かたまりを入れると、何か身が穢けがれるような気がした。空気のような食べものは無いかと思う。腹が減ると飢えは充分感じるのだが、うっかり食べる気はしなかった。床の間の冷たく透き通った水晶の置きものに、舌を当てたり、頬をついたりした。飢えぬいて、頭の中が澄み切ったまま、だんだん、気が遠くなって行く。それが谷地の池水を隔てて丘の後へ入りかける夕陽を眺めているときでもあると、子どもはこのままのめり倒れて死んでも構わないとさえ思う。だが、この場合はくぼんだ腹にきつく締めつけてある帯の間に両手を無理にさし込み、体は前のめりのまま首だけ仰あおのいて

「お母さあん」

と呼ぶ。子供の呼んだのは、現在の生みの母のことではなかった。子供は現在の生みの母は家族じゅうで一番好きである。けれども子供にはまだ他に自分に「お母さん」と呼ばれる女性があつて、どこかに居そうな気がした。自分がいま呼んで、もし「はい」といってその女性が目の前に出て来たなら自分はびっくりして気絶してしまうに違いないと思う。しかし呼ぶことだけは悲しい楽しさだった。

（中略。ある日の夕食、子供は食べたものを吐いてしまう。）

そのヨクジツaであつた。母親は青葉の映りの濃く射す 1 へ新しい莫蔭ござを敷き、俎板まないただの包丁だの水桶みずおけだの蠅帳はいちようだの持ち出した。それもみな買い立ての真新しいものだった。

母親は自分と俎板を隔てた向こう側に子供を座らせた。子供の前には膳の上の一つの皿を置いた。

母親は、腕まくりして、薔薇ばらいろの掌てのひらを差し出して手品師のように、手の裏表を返して子供に見せた。それからその手を言葉と共に調子づけてこすりながら言った。

「よくご覧、使う道具は、みんな新しいものだよ。それから拵こしらえる人は、おまえさんの母さんだよ。手はこんなにもよくきれいに洗つてあるよ。分かったかい。分かったら、さ、そこで——」

母親は、鉢の中で炊きさました飯に酢を混ぜた。母親も子供もこんこんむせた。それから母親はその鉢を傍らに寄せて、中からいくらか

の飯の分量をつかみ出して、両手で小さく長方形に握った。

蠅帳の中には、すでに鮪の具が調理されてあった。母親は素早くその中からひとときれを取り出してそれからちよつと押さえて、長方形に握った飯の上へ載せた。子供の前の膳の上の皿へ置いた。玉子焼き鮪だった。

「ほら、鮪だよ、おすしだよ。手々で、じかにつかんで食べてもよいのだよ」

子供は、その通りにした。はだかの肌をするする撫でられるようなころ合いの酸味に、飯と、玉子のあまみがほろほろに交じったあじわいが丁度舌一ぱいに乗った具合——それをひとつ食べてしまうと体を母にすりつけたいほど、おいしさと、親しさが、ぬくめた香湯のように子供の身うち**b**にワいた。

子供はおいしいと言うのが、**2**ので、ただ、にいつと笑って、母の顔を見上げた。

「そら、もひとつ、いいかね」

母親は、また手品師のように、手をうら返しにして見せた後、飯を握り、蠅帳から具の一切れを取りだして押しつけ、子供の皿に置いた。

子供は今度は握った飯の上に乗った白く長方形の切片を気味悪く覗いた。すると母親は怖くない程度の**3**になつて

「何でもありません、白い**X**だと思つて食べればいいんです」といった。

かくて、子供は、烏賊**い**かというものを生まれて始めて食べた。象牙のような滑らかさがあつて、生餅より、よつぽど齒切れがよかつた。子供は烏賊鮪を食べていたその冒険のさなか、**4**息のようなものを、はつ、として顔の力みを解いた。うまかつたことは、笑い顔でしか現わさなかつた。

母親は、こんどは、飯の上に、**②**白く透きとおる切片をつけて出した。子供は、それを取つて口へ持つて行くときに、脅かされるにおいに掠められたが、鼻を詰まらせて、思い切つて口の中へ入れた。

白く透き通る切片は、咀嚼のために、上品なうま味に突きくずされ、程よい滋味の圧感に混じつて、子供の細い咽喉へ通つて行つた。

「今のは、たしかに、ほんとうの魚に違いない。自分は、魚が食べられたのだ——」

そう気づくと、子供は、はじめて、生きているものを噛み殺したようなセイフクと新鮮を感じ、あたりを広く見回したい喜びを感じた。むずむずする両方の脇腹を、同じような喜びで、じっとしていられない手の指でつかみ搔いた。

「ひ ひ ひ ひ ひ」

むやみに疝高に子供は笑った。母親は、勝利は自分のものだと思つてとると、指についた飯粒を、ひとつひとつ払い落したりしてから、わざと落ちついて蠅帳のなかを子供に見せぬよう覗いて言った。

「さあ、こんどは、何にしようかね……はてね……まだあるかしらん……」

子供は焦立ってゼッキョウする。

「すし！ すし」

母親は、嬉しいのをぐつと堪える少し呆けたような——それは子供が、母としては一ばん好きな表情で、シヨウガイ忘れ得ない美しい顔をして

「では、お客さまのお好みによりまして、次を差し上げます」

最初のときのように、薔薇いろの手を子供の目の前に近づけ、母はまたも手品師のように裏と表を返して見せてから鰯を握り出した。同じような白い身の魚の鰯が握り出された。

母親はまず最初の試みに注意深く色と生臭の無い魚肉を選んだらしい。それは鯛と比良目であった。

子供は続けて食べた。母親が握って皿の上に置くのと、子供がつかみ取る手と、競争するようになった。その熱中が、母と子を何も考えず、意識しない一つの気持ちの痺れた世界に牽き入れた。五つ六つの鰯が握られて、つかみ取られて、食べられる——その運びに面白く調子がついて来た。素人の母親の握る鰯は、いちいち大きさが違って、形も 5 だった。鰯は、皿の上に、ころりと倒れて、載せた具を傍らへ落すものもあつた。子供は、そういうものへかえって愛感を覚え、自分で形を調べて食べると余計おいしい気がした。子供は、ふと、日頃、内しよで呼んでいるも一人の幻想のなかの母といま目の前に鰯を握っている母とが目の感覚だけか頭の中でか、一致しかけ一重の姿に紛れている気がした。もっと、ぴったり、一致して欲しいが、あまり一致したら恐ろしい気もする。

自分が、いつも、誰にも内しよで呼ぶ母はやはり、この母親であったのかしら、それがこんなにも自分においしいものを食べさせてくれるこの母であつたのなら、内密に心を外の母に移していたのが悪かった気がした。

(岡本かの子『鯨』による)

(注)

蠅帳……ハエ等の虫が食品に寄りつくのを防ぐ道具。

香湯……香りのよい湯。

問一 二重傍線部 a と e の片仮名を漢字に直せ。

問二 空欄

1

5

に入る最も適当な語を、次のア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

- | | | | | | | | | |
|---|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|
| 1 | ア | 敷居 | イ | 仏壇 | ウ | 納戸 | エ | 縁側 |
| 2 | ア | むずがゆい | イ | きまり悪い | ウ | やるせない | エ | 誇らしい |
| 3 | ア | 真骨頂 | イ | 大得意 | ウ | 居丈高 | エ | 内弁慶 |
| 4 | ア | 飲んでいた | イ | 止めていた | ウ | 詰めていた | エ | 吐いていた |
| 5 | ア | 大ぶり | イ | 不細工 | ウ | 小奇麗 | エ | 月並み |

問三 空欄

X

にあてはまる語句を、本文中から五字以内で抜き出して答えよ。

問四 傍線部①「呼ぶことだけは悲しい楽しさだった」とは、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 自分の本当の母が過去にいたので、それを思い出すのは悲しさがつきまとう。
- イ 自分の理想の母が目の前に現れたら嬉しいと、ひとりで空想を楽しんでいる。
- ウ 自分の飢えを満たしてくれる母を求めているが、そのような母が存在しない。
- エ 自分の理想の母を想像してみるが、ただ呼ぶだけでは悲しさばかりがつのる。

問五 傍線部②「白い透きとおる切片」とあるが、母がこれを選んだのは、子供がどのような性質だからか。それが最もよく分かる一文を本文中から探し、三十五字以内に要約して説明せよ。

問六 傍線部③「勝利は自分のものだ」と見てとると」とあるが、母親がそのように見てとったのはなぜか。本文中の語句を使って四十字以内で説明せよ。

問七 傍線部④「生臭」とあるが、これと同じ意味の語句を、本文中から十字以内で抜き出して答えよ。

問八 傍線部⑤「母と子を何も考えず、意識しない一つの気持ちの痺れた世界に牽き入れた」とあるが、子供が鰯を食べる前にも、母と子の同調を予期させる描写がある。該当する一文を、本文中から十五字以内で抜き出して答えよ。

問九 傍線部⑥「あまり一致したら恐ろしい気もする」とあるが、どのような気持ちをいうか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 家族じゅうで一ばん好きな母親であるのに、鯨を食べるまで外の母に心を移していたことへの申し訳なさ。
- イ 現在の母親と外の母が一致すれば、幻想のなかの「お母さん」が現実化してしまうことへのかすかな不安。
- ウ おいしいものを食べさせてくれた現在の母親こそ、内しよで呼んでいた母だと気づいたことへの気まぐさ。
- エ 鯨を食べさせてくれた現在の母親も、結局は心を移してきた「お母さん」でないかもしれないという疑念。

□ 次の文章を読んで、後の問に答えよ（字数制限のあるものは、すべて句読点等を含む。設問の都合上、原文の一部を改変している）。

行事日は、いうまでもなくハレの日である。それは、農山漁村も都市もかわりがない。

だが、都市のまつりは、ひととき盛大であるものが多い。それは、人口の集中がなせること、といえはそれまでだ。だが、もうひとつの理由があげられる。都市にはハレの要素が日常生活のなかに拡散しているから、まつりであればふつうのハレの倍増、三倍増といったにぎわいが生まれてくるのである。そして、信仰^①からなる本来の行事も伝わるものの、都市住民というのは概して流行に敏感であり、そのところで行事の周辺で遊戯化が進む。A、遊戯化が進んだ部分がさらにヒダイ化^aして、それがまつりの呼びものにもなるのである。

たとえば、東京の山王祭・明神祭・天神祭、京都の祇園祭・大阪の天神祭、博多のドンタク（祇園祭）、長崎のオクンチ（御九日）などがそうである。豪華な山車や神輿が町中を練り歩き、群集は狂喜乱舞する。また、そこでの人出をあてにして露店や大道芸も集まってくる。

こうした大規模なまつりは、どちらかといえば城下町や宿場町よりも、商都や港町に多くみられる。B、まつりをイジ^bするための資金の調達、守旧性の強い城下や宿場に比べるとはかりやすいからだろう。また、江戸時代までさかのぼってみると、武士権力の支配が比較的ゆるやかで、住民の自由度も高かったからだろう。

とはいっても、それは、現象面からの観察で、まつりの意味は別にある。ここでは、祇園祭を例にそれを考察してみたい。祇園祭は、京都にあり、博多や会津田島（福島県）にもある。

② 都市は、もともと多様な人びとが集まり生活する場であるとともに、諸国の人びとが訪れては去る通過地でもある。そこでのまつりは、農山漁村のまつりとは、おのずから異なつた原理をそなえているはずだ。

江戸時代以降、明治前半までの日本は、圧倒的に農村人口が多かった。山村や漁村も、生活の半分は農業にイゾン^cしていた。したがって、庶民といえは大方が農民をさしたのであつて、民間の行事もすなわち農村行事とみればよかつたからである。

そこでは、まずその生業^{なりわい}の繁栄、つまり豊穰^{ほうじょう}や大漁を祈願し、収穫（獲）の喜びをカミとヒトとが分かちあうことに最大の意義があつ

た。何百年もの間、営々とそうしてきたのは、そこが代々定住の地であったからでもある。

C、都市では、出自の異なる多様な人びととその多様な生活があつて、信仰もまた多様な展開をみせている。すべての人をつつみこむ共同体としての祈願は、当然、農山漁村とは別種のものなのである。

祇園祭の場合、それは、「疫（やど）よけ」であつた。

まず、このまつりは、御霊会ごりようえとして誕生している。祇園御霊会、略して祇園会という。

古く日本の信仰では、火災や疫病などの厄災は、ヒゴウdの死をとげた人の怨霊のたたりである、とされた。とくに、火災や疫病をおそれるのは、人家の密集する町場である。そこで、霊をなだめ、災害をまぬがれるためのまつりを行なう。そのひとつが、御霊会であつたのだ。

それが、やがて政争の犠牲者を祀るかたちで朝廷のまつりにとりいれられていく。そのなかで、京都の祇園社（八坂神社）は、貞観一八年（八七六）に牛頭天王ごずてんのうを勧請かんじようしたのはじまり、とされる。牛頭天王は、もとは天竺てんじくの祇園精舎の守護神、あるいは新羅しらぎの牛頭山のカミともいわれる。そして、日本では、素戔嗚尊すさののみことにあたる、とされる。

祇園社に勧請された牛頭天王は、その神像があばた顔で描かれるようになった。疫病のなかでもっともおそれられていた疱瘡ほうそう（天然痘）封じのカミとして崇められるようになったのである。疫病を避けたいという心情は、平安の都に住む人びとにとって、貴族であれ庶民であれ共通の願望であつたに相違ない。

D、それは、以来千年以上にわたって、日本の都市のまつりの主眼として伝え続けられてきたものでもある。

こうした疫よけを祈願する都市のまつりは、夏場に行なわれる。疫病、洪水や雷害は夏場に生じるのであるから、当然のことである。ちなみに、都市部のまつりでも、夏場以外に行なわれるものがある。大阪の住吉大社（五月上卯かみのうの日）、生国魂神社いくくにたま（五月五日）、あるいは京都の上賀茂かみがも、下鴨しもがもの両社の祭礼（葵祭あおい、五月一五日）など。それらは、もともと郊外地にあつて、農耕儀礼と深く結びついていたからである。

なお、都市において夏まつりがさかんになった二義的な要因として、町場の夏の蒸し暑さも無視はできないであろう。人家が密集したところでのそれは、農山漁村の比ではない。逃げ場のない都市住民にとって、夏まつりは、いけば酷暑を逆手にとつての再生法でもあつたの

だ。

いまも、冬と夏（二月と八月）の商業活動の落ち込みを、「二八の枯れ」というが、とくに夏の暑さは人びとの活動を停滞させる。日常の活動がにぶる季節に、つまりケガレた季節に、ハレの祝祭を準備して、そこに人出を喚起する。人出があれば、消費経済が活発になる。一時的にせよ、人びとが活性化もするのである。

つまり、ケガレを晴らす。まつりの目的もそこにあるのだ。

都市とは、混沌としてハタンの要因にとんだ生活空間である。今日の私たちの周辺でも、新たな都市生活が新たな人的災害を生み、さまざまな不安や恐怖を与えている。大気汚染、交通禍、テロ、サージ、戦争、誘拐、不況など。人びとが祇園祭に出かけて疫よけのチマキを争って授かるうとするのも、ただの慣行や興味ばかりではないだろう。

（神崎宣武『「まつり」の食文化』による）

（注）

勸請……神仏の分身を別の土地でもまつること。

天竺……インドの古称

新羅……古代の朝鮮半島にあった国の名

疱瘡……大流行を繰り返して多数の死亡者を出した急性発疹を伴う伝染病。発疹の痕跡が「あばた」と称された。

問一 二重傍線部 a、e の片仮名を漢字に直せ。

問二 空欄 A、D を補うのに最も適当な語を、次のア、エの中から一つずつ選び、記号で答えよ（同じ選択肢は一度しか使えない）。

- ア しかし イ まず ウ やがて エ そして

問三 次の文章は「ハレ」について説明したものである。この文章を読んで後の各問に答えよ。

民俗学の概念として「ハレ」という語を初めて使用したのは柳田国男である。「ハレ」とは、祭礼や正月・盆などの年中行事、あるいは婚礼・葬儀などが行われる日や時間帯を指したり、空間的には神社・寺院などの I の対象となる神仏の存在する、神聖な場を指す語である。いずれも II の生活とは離れた特別な時間帯であり、空間であると言える。

i 空欄 I、II を補うのに最も適当な語を、それぞれ本文中から抜き出して答えよ。

ii 柳田国男の著書を次のア、エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 銀河鉄道の夜 イ 走れメロス ウ 遠野物語 エ 暗夜行路

問四 傍線部①「信仰からなる本来の行事」と筆者が述べる事柄にあてはまるものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 豪華な山車や神輿の巡行を囲む人々の狂喜乱舞
- イ 怨霊を鎮め厄災を回避しようとする呪術や祈祷きとら
- ウ まつりを開催するための資金調達としての寄進
- エ 露店や大道芸を目当てにした、たくさんの人出

問五 傍線部②「農山漁村のまつりとは、おのずから異なった原理をそなえているはずだ」と、筆者は農山漁村と都市のまつりの違いを述べている。そのように述べる理由を六十字以内で記せ。

問六 傍線部③「それ」の指示する部分を、本文中から二十字以内で抜き出して答えよ。

問七 傍線部④「農耕儀礼と深く結びついていた」とあるが、筆者がそれらのまつりの目的と意義を述べている一文を本文中から抜き出し、最初と最後の五字を記せ。

問八 傍線部⑤「夏まつりは、いわば酷暑を逆手にとつての再生法でもあったのだ」と筆者が述べる理由として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 人出によって多様な現象が発生する都市では、活動がにぶる夏の祭礼が人々を最も集団化しやすいから。
- イ 人出によって都市に流入する異質な活力が、停滞していた人々を触発し流動化を進める効果があるから。
- ウ 人出のもたらす経済効果で生活に余裕を獲得した人々が、多様で独創的な活動を始める効果があるから。
- エ 人出を喚起することによって都市を活性化し、夏の暑さで停滞した人々を活動的にする効果があるから。

三 次の文章を読んで、後の間に答えよ（設問の都合上、原文の一部を改変している）。

ある殿上人^a、五月の二十日余りのころ、いと暗きに、太后^bの宮に参りて、馬道^{めだう}にたたずみけるに、上より、人の音のあまたしてきたりければ、さりげなくひき隠れてのぞきけるに、壺^{つぼ}の遺水^cに、螢^{はたる}の多くすだくを見て、さきなる女房、^B「ゆゆしき螢かな。集めたらむやうにこそ ^X」とて過ぐるに、次なる人、優なる声にて、「螢火^{けいくわ}乱れ飛びて」と口ずさびけり。また次なる人、「夕殿^{せきでん}に螢飛びて」とうちながむ。しりなる人、¹「隠れぬものは夏虫の」とはなやかにひとりごちたりけり。とりどりにやさしくおもしろくて、この男、何といふふしもなからむが本意³なくて、²ねず鳴きをし出^いでたりければ、先なる女房、「ものおそろしや。螢にも声のありけるよ」とて、つやつや騒ぎたるけしきもなく、うちしめりたる空^cおほめきのほども、あまりに色深くなしう覚えけるに、いまひとり、「鳴く虫よりもこそ思ひしが」と、とりなしたりける。これまた思ひ入りたるほど、堪へがたく奥ゆかしかりけり。すべてとりどりに、いと ^Yぞ覚えける。その心は、

音もせでみさをに燃ゆる螢こそ鳴く虫よりもあはれなりけれ

『十訓抄』第一の一五より

(注)

太后……皇太后。ここでは、一条天皇の中宮であった彰子（上東門院）のこと。

上……宮殿の奥に近い方をさす。

螢火乱れ飛びて……「螢火乱れ飛秋已近、辰星早没夜初長（螢火乱れ飛びて秋すでに近く、辰星早く没して夜初めて長し）」（『和漢朗詠集』）

の一部。螢が乱れ飛んでもう秋がすぐそこに来ていることを教えてくれ、辰星（水星）は早くも西の空に沈んで夜長の季節がおとずれたという、秋の気配をうたっている。

夕殿に螢飛びて……「夕殿螢飛思悄然（夕殿に螢飛びて思ひ悄然たり）」（『長恨歌』）の一節。暮れゆく屋敷に螢が飛んで、愁いに沈ん

でいる様子を描く。

問一 二重傍線部 a↘d の漢字の読みを平仮名で答えよ。

問二 空欄 X に入る語として最も適当なものを、次のア↘エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 見たり イ 見る ウ 見ゆれ エ 見し

問三 波線部 1↘5 の助動詞の意味として最も適当なものを、それぞれ次のア↘オの中から一つ選び、記号で答えよ。ただし、同じ記号は二度使えない。

ア 過去 イ 完了 ウ 詠嘆 エ 断定 オ 婉曲^{えん}

問四 傍線部 A↘C の語句の解釈として最も適当なものを、それぞれ次のア↘エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- A 人の音のあまたしてきたりければ、
ア 人の足音が乱れてきたとしたら、
イ ささまざまな音を出す人がやってきて、
ウ 人の奏でる音色が重なって聞こえてきて、
エ たくさんの人の話し声がして近づいてきたので、

B ゆゆしき螢かな

- ア 重大な螢の群れ様かしら
- イ たいへんな数の螢だなあ
- ウ 立派な姿の螢であるなあ
- エ 不吉な螢ではないのかな

C 空おぼめき

- ア そしらぬ様子
- イ 螢が飛ぶ様子
- ウ 空が気になる様子
- エ 気がつかない様子

問五 傍線部①「隠れぬものは夏虫の」は、「つつめども隠れぬものは夏虫の身よりあまれる思ひなりけり」(『後撰和歌集』夏)を踏まえ
たものである。どのようなことが伝えたかったのか、それを説明する文章のうち、最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選
び、記号で答えよ。

- ア 夏の虫は、鳴いたり刺したり、少しも隠れてはいない、ということ。
- イ 隠しきれないものは、螢の身からあふれ出る光である、ということ。
- ウ 人をいとおしく思う気持ちは包んでもあふれてしまう、ということ。
- エ 螢が身を焦がす火と、自分の身を焦がす思いは同じだ、ということ。

問六 傍線部②「ねず鳴きをし出でたりければ」を現代語訳せよ。

問七 空欄 Y に入る語句として、最も適当なものを次のア～エの中から一つ選べ。

ア かなしく イ やさしく ウ あいなく エ すさまじく

問八 『十訓抄』とほぼ同時代に成立したと思われる作品を、次のア～オのうちから一つ選べ。

ア 方丈記 イ 徒然草 ウ 源氏物語 エ 今昔物語集 オ 太平記